

現場に学ぶ医療福祉倫理 第7回 国連障害者権利委員会委員として、内閣府障害政策委員会委員長として見えた日本

障害の社会モデルと合理的配慮についての学び

25S1080 菅原由佳

医学モデルと社会モデルの違いへの理解

講義を通して、医学モデルと社会モデルの考え方の違いは、「問題がどこにあるのか」という理解の相違であることを改めて認識いたしました。特に、障害の社会モデルでは、障害を個人の問題として捉えるのではなく、社会や環境が生み出しているという視点を学ぶことができました。この考え方は、障害をもつ人々が社会の一員として完全に参加し、同等の機会を享受できるようにするための基盤であると実感しました。

母親として、教育者としての気づき

私自身、障害を持つ子どもの母親でもあり、「社会は障壁を取り除く責任がある」という先生のお言葉が心に深く響きました。特に、「合理的配慮とは気配りではなく、環境を整えることである」とのご説明に大きな気づきを得ました。これまで、配慮をする側・受ける側の双方で「特別扱い」という感覚を持っていましたが、社会的環境を整えることで平等なスタートラインをつくるという意味を理解し、合理的配慮の本質を学ぶことができました。

精神疾患を抱える学生への合理的配慮の難しさ

私は現在、看護大学生の臨地実習を指導する教員をしております。近年、精神疾患を抱える学生も増加しており、教育現場での合理的配慮が複雑化していると感じます。眠れない、辛い、やる気が出ないなどの訴えを聞く場面も多くありますが、専門職を育てる立場として、どのように支援すればよいか常に葛藤があります。目に見える障害であれば合理的配慮の線引きが明確ですが、精神的な障害は理解や対応が難しいと痛感しています。

インクルーシブ教育への期待と決意

先生が講義でお話くださったように、障害のある子どもがすべての教育段階で個別支援を受けられるよう、質の高いインクルーシブ教育に関する国家的計画が採択されることは理想的であり、障害を持った学生もいきいきと学ぶことができる社会の実現を願っています。先生がおっしゃっていたように、海外のようにこのような社会を日本も築いていけることを期待し、私自身もその一助となれるよう学びを深めていきたいと感じました。障害のある子を育てる母親として、そして看護教育者として、そのような未来が現実となることを心から待ち望んでおります。

結びに、今回の講義を通して、教育現場での合理的配慮を「特別扱い」ではなく「学ぶ権利の保障」として捉える視点を学び、大変貴重な機会となりました。心より感謝申し上げます。

